敦賀市産業経済部新幹線まちづくり課

1. 現況

(1) 敦賀市の観光動向

- 観光客の約8割は中京・関西圏から。関東からは少なく、敦賀のイメージが定まってない。
- 平成34年度に北陸新幹線が延伸され、飛躍が期待される。

(2) 金ヶ崎周辺エリア

- かつては港と鉄道で開かれた日本の玄関口だった。
- ミライエ等のイベントや、赤レンガ倉庫の運用開始により、観光客は増加傾向にある。

(3) 人道の港 敦賀ムゼウム

- ポーランド孤児やユダヤ人難民が敦賀を通って自由を手に入れた事象を顕彰。
- 杉原千畝の映画化や、世界記憶遺産への登録申請で注目を浴び、利用者数が増加。

(4) エリア内外の鉄道遺産

- エリア内に赤レンガ倉庫・ランプ小屋・敦賀港線等が存在。
- 敦賀駅にあった転車台の活用を福井県が検討中。
- 市内外に眼鏡橋や北陸トンネル群等の鉄道遺産が点在。

観光客・利用者数	27(2015)年	28(2016)年
金ヶ崎エリア全体 ※1	156,200人	356,100人
赤レンガ倉庫 ※2	69,400人	212,400人
人道の港敦賀ムゼウム	26,900人	48,900人

※1 赤レンガ倉庫・ランプ小屋・旧敦賀港駅舎・ムゼウムの年間利用者数＋ミライエ動員数
※2 赤レンガ倉庫の27年は約5ヶ月間

2. 上位計画

(1) 敦賀市再興プラン

第6次敦賀市総合計画後期基本計画実施計画

市民とともに進める
魅力と活力あふれる 港まち敦賀の再興

- 世界をつなぐ港まち みんなで拓く交流拠点都市 敦賀
- 市民とともに進める 魅力と活力あふれる 港まち敦賀の再興

(2) 敦賀市観光振興計画（平成25年度～34年度）

- 港と鉄道を本市の象徴として位置付け、これらを核とした観光の【まちづくり】
- 敦賀に関わる全ての人が、感謝の気持ちでおもてなしできるような【ひとづくり】

(3) 金ヶ崎周辺整備構想（平成24年）

～敦賀ノスタルジアム～

- ノスタルジー　古き良き時代を感じる
- ミュージアム　金ヶ崎全体が博物館

- 鉄道と港をテーマに明治後期～昭和初期の時代を演出。

※イメージ図

(4) 景観まちづくり刷新モデル地区

- 国土交通省より、観光拠点「人道の港」の整備とまちなみ刷新としてモデル地区に選定。

3. 課題

(1) 敦賀市

- 「ここ！」と言える観光資源が外部からは見えにくい（特に関東圏）。
- 市内の各観光資源を結びつける取り組みは発展途上の段階。

(2) 金ヶ崎周辺エリア

- 港湾施設等の整備により、古き良き敦賀のイメージが見えない。目に見える景色に乏しい。
- 金ヶ崎周辺を巡るしかけに乏しい。

(3) 敦賀ムゼウム

- メッセージを伝えるための情報や資料等、コンテンツが不足している。
- 観光客を受け入れるスペースの不足。バリアフリー対策も不十分。

(4) 鉄道遺産等

- 福井県で検討中の敦賀駅の転車台やSLの動態展示との調整。
- 市内や周辺に点在する鉄道遺産等へ回遊させるしくみが不足。

4. 基本方針　敦賀だからこそ表現できる、ノスタルジックな景観の中で「命」と「平和」の尊さを考える、ストーリーと場を実現

既存資源・取り組みの有効活用

- 赤レンガ倉庫や敦賀港線等の鉄道遺産をはじめ、既存資源を有効活用。
- 数々の「鉄道と港」のまちづくりの取り組みを発展拡張させ磨きをかけていく。

＋

古きよき敦賀を可視化

- 敦賀の古き良き時代、明治から昭和初期を意識した景観の再現を検討。
- 資源をつなぎ、金ヶ崎ならではのストーリーを提供、エリアの回遊性を高める。

＋

人道の港ブランドの確立

- 市民が難民を暖かく受け入れた事実が輝く、「ノスタルジー」×「人道」で敦賀だけのストーリー。
- 「命」の尊さ、「平和」の大切さを考えてもらう。

新たな観光拠点の出現で敦賀市の知名度の向上 ▶ **回遊性を向上させ観光振興・経済振興に寄与** ▶ **敦賀市のブランド向上に寄与**

5. 事業計画　多様な属性の利用者に向け、エリア全体できめ細やかに諸事業を展開

(1) 基本的な考え方

市民に愛される
- 市民に愛される場所にこそ多くの人が訪れる。市民がいつでも気軽に立ち寄れるようにする。

来訪の少ない層を取り込む
- 来訪の少ない関東圏の観光客や海外の観光客は積極的に呼び込む。

何度でも来てもらう
- 金ヶ崎をはじめ、敦賀の様々な魅力を知ってもらい、また来たいと思ってもらえるようにする。

(2) エリア全体で展開する諸事業

凡例：金 金ヶ崎周辺エリア全体で展開する事業　ム 主にムゼウムで展開する事業　鉄 主に鉄道遺産で展開する事業

中核として展開する事業

- **展示・演出事業**：人道の港の顕彰 敦賀の輝かしい時代の演出
- **教育普及事業**：プログラムの開発・提供 学校教育・社会教育
- **交流・サービス事業**：利用者サービスの提供 関係機関との連携
- **広報・情報発信事業**：興味を示してもらえるような情報発信

ベースとなる事業

- **収集保存調査研究事業**：コンテンツやプログラムを開発し、提供するための資料・情報の蓄積

① 展示・演出事業 金 ム 鉄

往時の雰囲気の中で命や平和の大切さを考える

ア.人道の港の顕在化
- ポーランド孤児やユダヤ人難民の軌跡と、これからも続く敦賀市民との交流をより一層顕彰。
- 常に新しいコンテンツを提供。

イ.敦賀の輝かしい時代を演出
- 東洋の波止場と謳われ、欧州から日本への玄関口として繁栄した近代の敦賀港の雰囲気を再現。

② 教育普及事業 金 ム 鉄

学校教育や社会教育のプログラムを開発・提供

ア.市民へ伝える
- 学校と連携し、市内の子どもたちに優しい人がいたまちや博愛の精神を知ってもらうプログラムを立案・実施。

イ.学習旅行や観光客へ伝える
- 社会科見学や修学旅行から、個人観光客、インバウンド等、多様なニーズに対応出来る見学パターンを立案・実施。

③ 交流・サービス事業 金 鉄

利用者を促す利便性の提供と多彩なイベント展開

ア.利用者への利便性提供
- 赤レンガ倉庫や今後整備するカフェやショップ等、滞在できる楽しみを提供し相乗効果が生み出せるようにする。

イ.市民が盛り上げるイベント
- エリア全体で様々なイベントを企画し、年間を通して実施する。

④ 広報・情報発信事業 金 ム 鉄

多くの人に興味を示してもらえる情報発信

ア.インターネットの効果的な活用
- ホームページやSNSを充実させ、日常から活発に情報発信。
- インバウンドに向け、情報発信は多言語化。

イ.ターゲットごとに情報を提供
- 趣味、性別や世代等、ターゲットを設定するなどし、的確に情報を提供する。

⑤ 収集保存調査研究事業 ム

人道の港ブランドの源泉となる資料や情報を蓄積・研究
- 人道の港ブランドの源泉となる資料や情報を蓄積。

市民・市民団体等との協働　／　**関連諸機関との連携・役割分担**

(3) 事業展開の効果

利用者の目的を分析
- 居心地が良かったり、休憩ができる。
- 珍しい、楽しい体験ができる。
- 学校教育としても利用できる。
- おもてなしの提供を受ける等

質の高いサービスであらゆる利用者の満足度を向上

市民　子どもファミリー　学習利用　個人旅行　団体旅行　外国人観光客

6. 金ヶ崎周辺エリアの配置計画

(1)エリア全体の整備方針 既存資源と一体的に整備して回遊性を高める

にぎわい形成

- 敦賀ノスタルジアムを感じさせる景観の演出
- 国内外の観光客の受入とおもてなしの提供
- 国内外への広報・情報発信
- 個人旅行客への情報提供
- エリア全体で行うイベント、カフェやショップ、多彩なアクティビティによる楽しみの提供

人道の港のブランド化

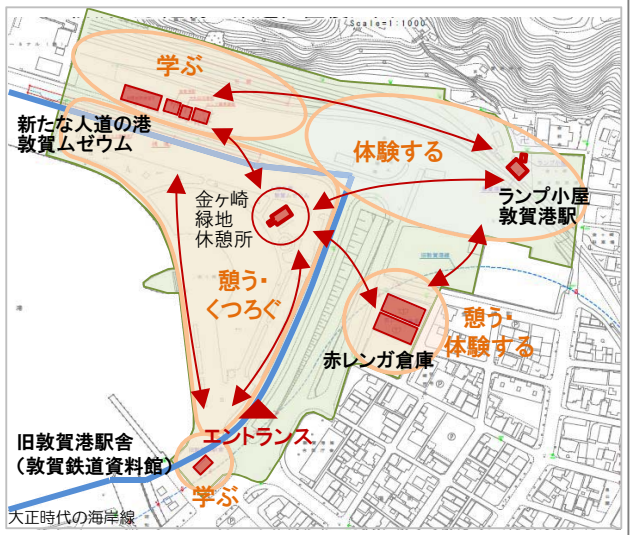
- 資料の収集保存・調査研究
- 学習旅行や国内外の観光客へ向けた、展示・教育普及による命と平和の大切さの訴及

エリア全体及び鉄道遺産の活用で担う

人道の港ムゼウムで担う

(2)基本的な考え方

- 市民が気軽に利用できるようにする。
- 周辺と一体的な整備により景観を整える。
- 既存資源を活かし、散策路等の整備によりそれらの間を楽しく回遊できるようにする。
- 税関旅具検査場、敦賀港駅、大和田回漕部、ロシア義勇艦隊の4棟を整備する。
- 駐車場を確保し利便性を高める。
- ボランティア等の活動拠点も検討する。



機能配置（案）

(3)憩う・くつろぐ

- 一体的に整備される金ヶ崎エリアのエントランスの役割を担い、エリア全体の管理機能や、総合案内所等を検討する。
- 利用者の利便性のため駐車場を拡張する。
- サポートするボランティアの拠点機能を検討。
- カフェやショップ機能の誘致。

(4)学ぶ

- 敦賀ノスタルジアムを感じさせる4棟を復元し、ムゼウム機能を拡充移転。
- 見やすく解りやすい展示や配置とする。
- 旧敦賀港駅舎（鉄道資料館）は、その機能を活かし、敦賀の鉄道史を紹介する。

(5)体験する

- 福井県が保管する、かつて敦賀駅にあった転車台の設置・活用を検討中。
- ランプ小屋やJR貨物が所有する用地や敦賀港駅舎の活用も併せ検討する。

(6)憩う・体験する

- 赤レンガ倉庫はこれまでの運営を継続させ、エリア全体との連携していく。
- 市民や観光客の利用を促進し、より一層のにぎわいと交流を形成していく。

(7)エリア全体で展開する事業

- 将来的には視界に拡がる範囲全体がノスタルジックに感じる景観の再現を目指していくとともに、フォトジェニックなランドマークづくりを検討していく。
- 四季の変化を楽しめるイベントを展開する等、これまでの民間団体等の取り組みを一層拡充させていく。

7. 人道の港敦賀ムゼウムの移転拡張

(1)移転する場所

- 景観まちづくり刷新モデル地区事業により、往時の建物を4棟復元する。ムゼウムは復元4棟に移転することが第2回策定委員会で示された。

(2)移転後の面積

- 現ムゼウムは、延床278㎡、展示面積177㎡。
- 復元4棟の想定面積は延床で約1000㎡を見込むため、移転で規模はおよそ3.8倍に拡充できる。

測量に基づく復元４棟の想定面積

建築物	建物面積	階層	延床面積	有効面積
❶税関旅具検査場	約404㎡	1階	約404㎡	約283㎡
❷敦賀港駅	約104㎡	2階	約208㎡	約146㎡
❸大和田回漕部	約90㎡	2階	約180㎡	約126㎡
❹ロシア義勇艦隊	約135㎡	2階	約270㎡	約189㎡
合計	約733㎡	―	約1,062㎡	約743㎡

建物面積は測量に基づく想定値。設計よって誤差が出る可能性がある。有効面積は、共用部（通路・倉庫・設備スペース等）を除いた、実質的に利用できる面積。延床面積の約７割で設定。

8. 人道の港敦賀ムゼウムの施設計画

(1)新たな人道の港敦賀ムゼウム 平和と博愛を考えるプログラムと場を拡充

① 復元4棟の概要

- 欧亜国際連絡列車が運行していた大正～昭和初期に、図中の示す位置にあった建物群。本事業で復元を予定。

右より、税関旅検査所、敦賀港駅、大和田回漕部、ロシア義勇艦隊

明治時代から昭和初期まではここが日本の玄関口だった

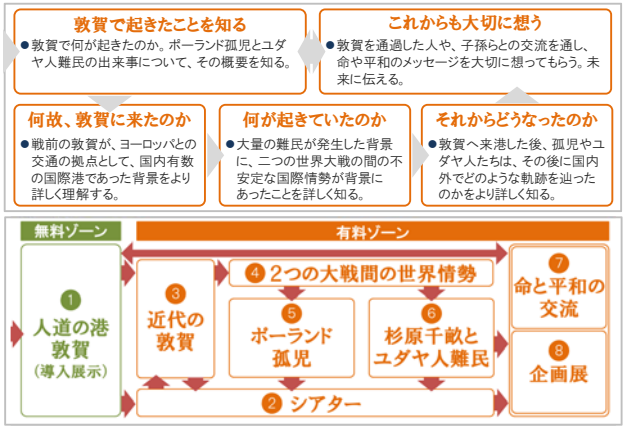
② ムゼウムの整備方針

- 新たに整備する復元4棟へ移転し、展示面積、展示内容等を拡充する。
- 平和と博愛を考える場の中心的な存在として、展示や教育普及等、十分な事業活動ができる規模を検討する。
- 市民が気軽に利用できるとともに、学習旅行等、団体観光客を十分に受け入れられるようにする。
- エリア内の既存施設と役割分担し、相乗効果を生み出せるようにする。

復元４棟のイメージ（案）　「敦賀港レトロロマンARアプリ」より

③ 機能構成・展示構成

- 誰でも等しく利用できるようにユニバーサルデザインの考え方を取り入れる。
- 展示の観覧は基本的に有料とする（減免措置は今後検討）。
- 市民の日常利用や、目的のない観光客等に対応できる様に無料展示を設ける。
- 各コーナーは団体見学者が余裕を持って見学できるようにする。
- スムーズな動線でストーリーに連続性を持たせるとともに、時系列でテンポ良く、解りやすく伝えられるようにする。
- シアター等、見応えのあるコンテンツを整える。



展示構成（案）

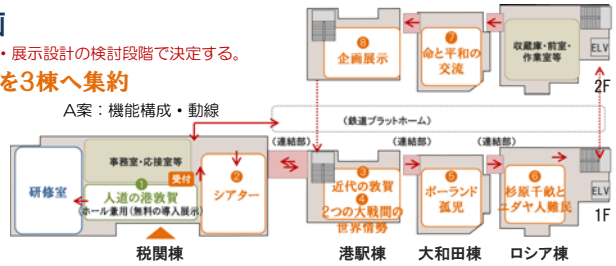
9. 人道の港敦賀ムゼウムの施設計画

※施設計画は、福井県検討業務の結果を受け、建築実施設計・展示設計の検討段階で決定する。

(1)A案　税関棟をエントランスに、主要展示を3棟へ集約

- 研修室とシアターが入口に近いので団体利用をスムーズに誘導できる。
- 1室1コーナーで余裕はあるが、特定コーナーの拡張性に乏しい。
- 展示の連続性を出しやすいが、収蔵庫が利用者動線上にあるため、セキュリティ対策が必要。

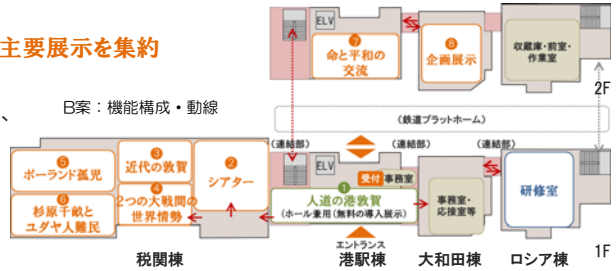
A案：機能構成・動線



(2)B案　港駅棟をエントランスに、税関棟へ主要展示を集約

- 港駅棟は南北2方向に入口を設けられ、県の計画する鉄道施設との連携が良くなり、周辺施設との利便性も向上する。
- セキュリティや、夜間の貸し室対応が行いやすく、運用上の拡張性が見込めるが、展示の連続性を保つ工夫が必要。

B案：機能構成・動線



10.鉄道遺産の整備方針

(1)整備方針

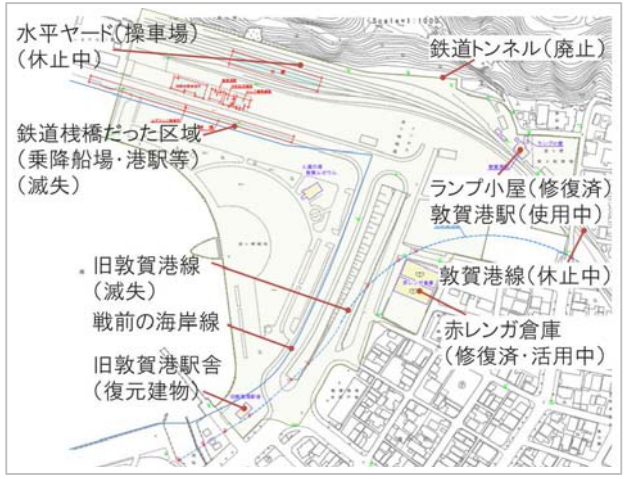
- ランプ小屋や軌道等、エリア内の港線の既存設備を有効活用する。
- 市内にある眼鏡橋等の鉄道遺産や北陸本線トンネル群等、市外の鉄道遺産とも連携し、回遊性を生み出す。

(2)新たに入手予定の鉄道遺産

- 平成27年に運行終了したトワイライトエクスプレスの牽引車は、敦賀地域鉄道部の所属車輌であり、敦賀に縁が深く、多くの人々に人気もあるためその部品等を展示やカフェ、レストラン等への活用等を検討し話題を高める。

(3)エリア内その他の鉄道遺産等

- 水平ヤード(操車場)や、敦賀港駅をはじめ、エリア内にはいくつかの鉄道遺産等が残されているが、その活用にあたっては、土地所有者であるJR貨物や福井県等と協議を重ねていく必要があることから、今後、諸条件等を検討していく。



図：金ヶ崎周辺エリアに残される鉄道遺産等

(4)転車台と車輌の動態展示(福井県で検討中)

- 福井県で敦賀駅の転車台の活用方法と、新エネルギーによる車輌の動態展示の可能性を調査中。
- 金ヶ崎周辺エリア内の設置を前提としていることから、機能構成や配置計画に大きく影響するため、福井県と緊密に連携し、その結果を踏まえた上で再検討していく。

11. 回遊性の創出

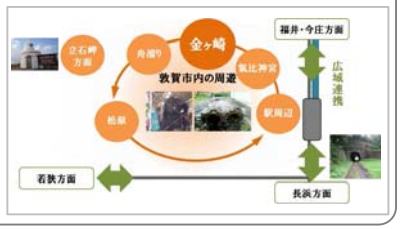
(1)中心市街地へ

- ユダヤ人難民が敦賀港から敦賀駅まで通ったルートを顕在化したり、眼鏡橋等の市内の鉄道遺産等を巡るプログラムを検討していく。

図：ユダヤ人難民の主な推定移動ルート

(2)さらに広域へ

- 金ヶ崎周辺エリアのにぎわい形成により、市内の観光資源をつなぐ。北陸本線トンネル群等、近隣の関連自治体とも連携し、広域の回遊性を生み出していく。



12. 管理運営計画　「質の高いサービスの提供」と「事業の継続性」の両立に留意

(1)質の高い管理運営計画

- 当該エリアにおいては、質の高いサービスを提供するため、民間活力導入等、様々な管理運営方法を検討していく。

(2)民間活力導入の留意点

- 調査研究・収集保存事業をはじめ、長期に渡る安定性・継続性を求められる事業も存在することから、運営方式や業務区分等は慎重に検討する。

(3)施設利用

① 開館日・開館時間

- 市民、観光客が利用しやすい開館日数・時間を設定する。
- 週休1日を基本とし、夏休み等は無休も検討する。
- 利用状況に応じ、開館時間の延長も視野に入れる。

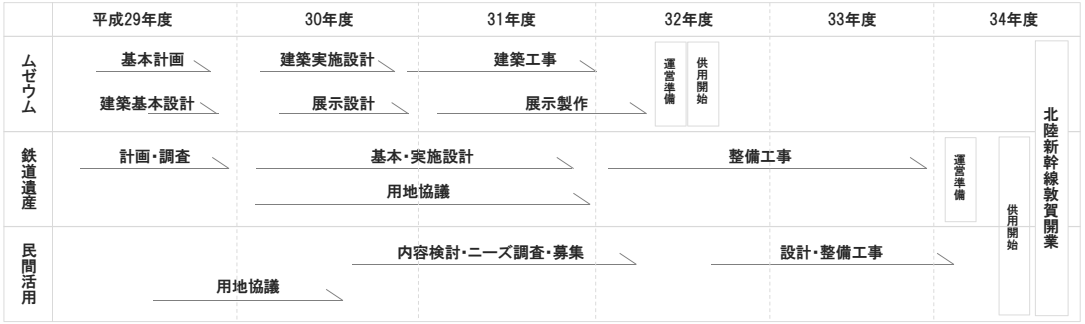
② 利用料金の考え方

- 施設を安定的に運営していくため、適切な料金を設定する。
- 団体・高齢者利用等は減免措置も検討する。

(4)組織体制

- 事業を継続的に展開するためには、組織自体にも安定性と継続性が求められる。
- 関係諸機関との連携や利用者のニーズに柔軟に対応できる組織を検討する。

13. 事業推進計画

(1)事業スケジュール

- 平成34年度の北陸新幹線の敦賀延伸を見据えてムゼウムの整備や鉄道遺産活用を実施する。
- また、金ヶ崎周辺整備構想で示されたカフェや物販機能の実現に向けても準備を行っていく。